

本健吉著
漱石
啄木
露伴

文藝春秋刊



著者略歴

1907年 長崎に生れる

1931年 慶応義塾大学卒

明大教授 芸術院会員

主著「古典と現代文学」

「柿本人麻呂」

「大伴家持」

「芭蕉」

「釋迢空」

「最新俳句歳時記」

昭和四十七年十月十五日 第一刷

漱石啄木露伴

定価 一〇〇〇円

著者 山本健吉

発行者 檉原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三番地
電話 〇三(二六五)一二一一

印刷 精興社
製本 中島製本
製函 加藤製函

*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

漱石 啄木 露伴 * 目次

夏目漱石の巻 附 正岡子規

漢詩の世界 9

漢詩の世界 つづき 25

新体詩と俳躰詩 39

『病牀六尺』の世界 59

述べて作ラズ 75

石川啄木の巻

鷗外と啄木 89

詩人という観念 99

詩人の変貌 112

詩人の変貌 つづき 130

『悲しき玩具』 142

幸田露伴の巻

明治の作家の「転向」 159

「雑学」の根底 167

「縁」の思想 176

「左国史漢」の文学 187

生きた人間の歴史 198

『運命』頌 208

『連環記』頌 218

附録 石橋忍月に関する二章

わが家の明治百年 237

明治の文学者の一経験 250

あとがき 265

漱石
啄木
露伴

夏目漱石の卷

附

正岡子規

漢詩の世界

一

私は微かなものからはいって行きたい。詩の話である。直接のきっかけは、吉川幸次郎氏著すところの『漱石詩注』をひもといたことによる。

これまで『漱石詩集』を通読したことは、一度もなかった。日本人の作った漢詩というものに対する不信感がある上に、日本語の詩のようにはなだらかに解読できないもどかしさが、私を『漱石詩集』から隔てていた。だが、吉川氏の『続人間詩話』などによって、それが中国人が讚めることのある、ごく例外的な日本人の漢詩であることを知った。そしてその前に、私は堀口大學氏の敵父九万一氏の「漱石の詩を論じ併せて日本の漢詩に及ぶ」という一文を読んでいて、専門の漢詩人ではないが漢詩をよくする人のあいだに、漱石の詩をよろこぶ人のあるのを知って

た。ことに九万一氏の場合は、氏が長城と号して漢詩堪能であったことの外に、ヨーロッパの近代詩に通じ、大学氏にフランス高踏派の詩を手引して読ませ、それらの翻訳をすすめたのが氏であったというような、氏の詩眼の斬新さが、陳腐で個性に乏しい近代日本の漢詩人の中で、漱石の詩を高く評価させたのであったろう。

好んで漢詩を作りながら、九万一氏は日本の漢詩というものが、詩の本来の性質から見て無理な存在であることを言っている。文芸は動植物と同じくその土地の産物であり、江南の橘も江北に移せば枳となる。古来日本人が作った漢詩は、決して少くはないが、そのうち日本人の口に膾炙しているのは、鞭声粛々、雲耶山耶、落花深処などごく少数に過ぎず、それもその詩が傑作であるからでなく、総ての点で日本的だからという理由に基づく。一方中国人から見ても好い詩だと讃められる星巖、淡窓、旭莊等の詩は、日本人では知っている者も少い。

このように言って、氏は日本における漢詩が、その善悪をみずから判断することができないという情ない境遇にあるのは、それが自国語を以て書かれていないからであるという。日本人にとって漢詩が不自然なことは、その最も精力を費して学習し、詩作に当って最も苦しめられる韻字平仄というものが、漢詩を訓読する日本人にとって何の用にも立たない徒勞であることだ。日本の漢詩は性格の流露ではなく、韻書と首ッ引で作りに上げた文字の細工に過ぎない。そして氏は、ロシア人やポーランド人が作ったフランス語の詩を評したスタエル夫人の言葉を引いて結びとす。「抑々外国語なるものは之を習ふものに取つては常に死語である。死語を以て、人を感動せしむる如き生きた詩を作らんと欲するのがすでに無理な注文である。自から感じたままを詩に表

現するには、その国の空気を呼吸しその国語を以て考へ、喜び、悲しまねばならぬものである。」これは当然の結語であつて、これに反対すべき理由はいささかもない。私は日本人の作った漢詩に、過度の意味と価値とを付与しようとする言説に、安易に与することはできない。だが漱石の漢詩は、そのような一般論を超えたところに位置するだろう。彼は言う。

「余の如き平仄もよく弁へず、韻脚もうろ覚えにししか覚えてゐないものが何を苦しんで、支那人に丈しか利目のない工夫を敢てしたかと云ふと、実は自分にも分らない。けれども（平仄韻字は省略して）、詩の趣は王朝以後の伝習で久しく日本化されて今日に至つたものだから、吾々位の年輩の日本人の頭からは、容易にこれを奪ひ去る事が出来ない。余は平生事に追はれて簡易な俳句すら作らない。詩となると億劫で猶手を下さない。ただ斯様に現実界を遠くに見て、杳はるかな心に些すこしの蟠わたかまりのないとき文、句も自然と湧き、詩も興に乗じて種々な形のもとに浮んでくる。さうして後から顧みると、夫が自分の生涯の中で一番幸福な時期なのである。風流を盛るべき器が、無作法な十七字と、佶屈な漢字以外に日本で発明されたいざ知らず、左もなければ、余は斯かる時、斯かる場合に臨んで、何時でも其無作法と其佶屈とを忍んで、風流を這裏に楽しんで悔いざるものである。さうして日本に他の恰好な詩形のないのを憾みとは決して思はないものである。」（思ひ出す事など）

この一節は大事な告白を含んでいるから、また後で立ちかえることがあるだろう。俳句のことは今しばらく問わぬ。平仄韻字の苦しい規則のもたらす佶屈さを忍んで、彼は漢詩の世界に遊ぶことをいささかも悔いないし、日本に他の恰好な詩形のないのを憾みとも思わないと言う。俳句

や短歌や漢詩以外に「他の恰好な詩形」をさぐろうとしたのが、新体詩の運動だが、それに対して漱石はきわめて冷淡であり、少くとも『吾輩は猫である』の制作当時は、揶揄嘲笑の態度を捨てなかつた。そこに、おのずから句が湧き、興に乗じて詩が浮ぶといったような自然な状態、従つてまた幸福な状態と違つた、ある構えた態度による制作品の臭味を感ぜずにはいなかつたのである。

もとより漢詩は、小説と違つて広く人に見せようとするものではなかつた。それを作ることによつて自分の心にある幸福と満足とをもたらせば足りたのである。だから、平仄韻字の法則に縛られるということも、みずから好んでしたこと、誰に強制されたわけでもなかつた。その法則に服し、その作り出す秩序の内側で遊ぼうとするのであつて、その法則がなかつたら、その遊びも成立しなかつたらう。もちろんそれは日本人の訓読による漢詩鑑賞法とは、まったくかわりがないことであり、訓読された漢詩とは別に、紙に書かれた白文のままの形で、辛うじて意味を有するに過ぎない。そこに音楽的諧調をもたらずものとしての韻字平仄の法則が、日本人の漢詩では、視覚的に納得するしかない一つの法則に転化する。それでもそれは守るべき法則なのか。

そうだと漱石は言い切るのである。だがその理由は、自分にも分らないと言う。そしてそのような努力を放擲したら、「風流を這裏に楽しんで悔いぬ」という境地から外れるであろうことを、彼は知っている。吉川氏によれば、漱石の漢詩はきわめて正確で、いわゆる日本漢文、日本漢詩では断じてない。無知から来る厚かましさを押し通して、「日本人の詩はこれでいいというそぶく」太平洋戦争中の軍人のような無神経無作法に、漱石は堪えなかつた。それは言わば士君子の遊び

であり、大陸で二千年にわたって持続した詩の秩序の世界に参ずることである。素手ではいれる世界ではない。そこで得るいささかの楽しみのために、私たちは巨額な元手を支払わねばならぬ。その楽しみと支払われる元手とのバランスは、あるいは失しているかも知れない。だが、そういうことを考え出したらおしまいである。漱石はもつと元手のかからない楽しみが欲しいなどとは思わない。他に恰好な詩形のないのを残念とは思わない。それは日本においても、すでに千年以上持ち続けられてきた楽しみであり、漱石と同年輩の日本人の頭から、その楽しみを奪い去ることはできない。

— それに、漱石がもつとも心を惹かれたのは七言律詩であった。律詩はもつとも嚴重に自分を規律で縛ることで、そこからにじみ出る快味をいちじるしく高度なものにしようとする詩形だと言えよう。代表的詩人はもちろん杜甫だが、彼は律詩のなかに、ある暗い鬱々とした人生感情に覆われた、こまやかさの極致のスタイルをうち樹てているようである。その杜詩の味わいが、断片的に、漱石の律詩の一、二行のなかに滲透し、にぶい輝きを発しているように、私は吉川氏の『漱石詩注』を読みながら感じたのである。

二

漱石の漢詩の二つの頂点は、明治四十三年修善寺大患後の平癒に向う時期と、大正五年『明暗』執筆の時期とである。修善寺大患後の詩は、詩句を得るに従って日記に書かれ、推敲された

形では『思ひ出す事など』に記されている。これは病気が小康を得て、修善寺の旅館から東京へ戻って来て、そのまま長与胃腸病院に入院し、八月二十四日の吐血前後からの経験、心境を振りかえったものである。三十三篇の各章の終りには、それぞれ俳句か漢詩が添えられていて、それらの作品の成った背景を推測せしめる。もっとも、作品はその回想より早く成っているのだし、文の枠にうまく嵌めこまれたきらいもあるから、やはり詩は文に引きずられず、それ自身として解読した方が無難である。

このとき得た詩や俳句は、病によってわずかに享け得た長閑のどかな気持、あるいは「陳腐ながら払底な趣」の産物である。もっとも、実際にはそれほど長閑でも風流でもなく、吉川氏の言う「思索者の詩」として、人間存在の孤独の沈鬱を鋭く剔出する。だが一応は、それは「閑適の境界」をしばらくでも貪った嬉しさの吐露であると言える。

その嬉しさが七言律詩に形を変じたものとして、漱石は池辺三山に与えた無題詩を挙げる。これは吉川氏が「集中の傑作の一つと感ぜられる」と言う詩だが、意を捕捉しにくいところもあり、まして漱石が「閑適を少時しばしなりとも貪り得る今の身の嬉しさ」が、此五十六字に形を変じたとは、そのまま受取りにくいところがある。むしろ、

斜陽 径に満ちて 僧を照らして遠く

黄葉の一村 寺を蔵ひそめて深し